

主 題：重荷を負い合う神の家族⑤**聖書箇所：ガラテヤ人への手紙 6章5節****テーマ：兄弟姉妹の罪に対してどのように私たちは応答すべきなのか？**

今朝、皆さんと見ていきたいのは、ガラテヤ人への手紙6：1-5のみことばです。当初、ここまで時間をかけて考えるとは思ってはいませんでした。この一月の間、私たちは重荷を負い合う神の家族について、特に兄弟姉妹の罪に対してとるべき正しい応答の10個の要素を順番に考えてきました。きょう、私たちは10個の要素の残された最後の一つを見たいと思います。

改めてこれまでの内容を振り返ってみると、罪や過ちに陥った兄弟姉妹、同じ神の家族に対して、聖書的にどのようにして向き合うべきなのか、そのことを少しでも自分のこととして考えることはできたでしょうか？あわれみをもって相手の罪を取り扱おうとすること、柔和な心で正しい状態への回復を追い求めてあげること、自分自身に細心の注意を払いながら、何よりも自分がへりくだって互いの重荷を負い合おうとすること、いろいろなことを学んできました。みことばの教えと自分自身の歩みを照らし合わせて吟味することはできたでしょうか？最初にも言いましたが、残念ながら私たちはみな天で主にお会いする日まではだれもが罪を持ち、自分が罪を犯すこともあれば、その罪によってだれかを深く悲しませてしまうこともあります。キリストを信じ、救われたからと言って、歩みのうちからいっさいの困難や問題が消え去ってしまうわけではないのです。この先も兄弟姉妹と奉仕や学び、信仰生活をともにしていけば、ますます相手のことがわかってきて、その人の良い部分が見えてくるのと同時に、弱い部分も見えてくるでしょう。私たちが神の家族としてともに生きていこうとすれば、間違いなく神様のすばらしさを分かち合い、ともに感謝することのできる場面もあれば、私たちがだれかを傷つけたり、逆にだれかが私たちを傷つけるような場面にも出くわすことはあるでしょう。そして、そうしていろいろな難しさを味わえば味わうほど、何度も傷つけられれば傷つけられるほど、喜びを失って同じ神の家族として生きていくことよりも、自分だけで信仰生活を送る方がいいという考え方に陥ってしまうかもしれません。

罪の問題や困難が現実のものとして存在しているからこそ、私たちは兄弟姉妹との間にそんな問題が生じた時に、いつでもみことばから正しく対応できる備えをしている必要があります。願わくは今回学んだことが皆さんの歩みを、みことばによってさらに吟味する助けになっていれればと思います。また同じ神様を愛している家族として、互いに重荷を負い合っていくこと、それをますますしていきたいと願う、その励ましになっていれればと強く思います。これまで九つのことを見てきました。最後、残された要素を見て終わりにしましょう。いつものようにまずは神様のことばをお読みしますので、これまでに学んできたことも思い返しながらか、よく耳を傾けてみてください。

ガラテヤ6：1-5

「1 兄弟たちよ。もしだれかがあやまちに陥ったなら、御霊の人であるあなたがたは、柔和な心でその人を正してあげなさい。また、自分自身も誘惑に陥らないように気をつけなさい。:2 互いの重荷を負い合い、そのようにしてキリストの律法を全うしなさい。:3 だれでも、りっぱでもない自分を何かりっぱでもあるかのように思うなら、自分を欺いているのです。:4 おのおの自分の行いをよく調べてみなさい。そうすれば、誇れると思ったことも、ただ自分だけの誇りで、ほかの人に対して誇れることではないでしょう。:5 人にはおのおの、負うべき自分自身の重荷があるのです。」

10. 自分の責任に最後まで忠実であること 5節

最後の10個目の要素は、自分の責任に最後まで忠実であることです。私たちはみんなそれぞれ神様から託されている務めや責任に対して、その一つ一つに最後まで忠実であり続けることが求められるということです。もう一度みことばを見ていただくと、5節にこのように記されていました。「人にはおのおの、負うべき自分自身の重荷があるのです」と。この箇所を読んで、もしかしたらある人は少し矛盾を感じたかもしれません。というのも少し戻って2節を見ると、パウロはそこではっきりと私たちが互いの重荷を負い合うようにと述べていました。いったいパウロは何を言わんとしていたのでしょうか？私たちが互いの重荷を負い合うべきなののでしょうか？それとも結局は自分ひとりで重荷を背負わなければならないのでしょうか？二つの箇所は相反することを言っているのでしょうか？もちろん聖書は矛盾したことを教えているのではありません。この箇所を正しく理解するためには大きく二つの注目すべきところがありました。

▶「重荷」

まず一つ目は2節で登場した「重荷」ということばと、5節で登場した「重荷」ということばには別のことばが使われているということです。具体的に見ると、2節で「重荷」と訳されていたことばには、“バロス”というギリシャ語が使われていて、ひとりでは持ち上げたり、運んだりするのが困難な非常に重たい荷物を表していました。自分では運べないものでした。自分ひとりだけでは背負えないほどのきつい労苦、困難、ひどい苦しみ、それが「重荷」と呼ばれるものであるからこそ、みことばはそれを互いに助け合って、負い合っていくようにと求めていたのです。ひとりでは運べないから、重荷を分かち合いなさいと。

一方、5節で「重荷」と訳されていたことばには、“フォルティアン”というギリシャ語が使われていました。そして、このことばも同じように重たい物を表すのは表すのですけれども、これは持ち上げたり、運ぶことのできる物、積荷やだれかが背負っている荷物、リュックサック、そういったものを表す意味が含まれていました。実際、別の箇所でも同じことばが用いられていて、例えば使徒27：10にはパウロが航海している時の話が出てくるのですが、そこには「皆さん。この航海では、きっと、積荷や船体だけではなく、私たちの生命にも、危害と大きな損失が及ぶと、私は考えます」と言った。」と記されていました。パウロのことばの中で「積荷」と訳されていたものが、今見ているのと同じことばになるのです。

これら二つのことばの意味の違いは、前者はひとりでは背負うことのできない物、後者はひとりでも背負うことのできる物でした。要するに、パウロはすべての信仰者にはほかの人と分かち合うべき、ひとりでは負えない重荷があるのに加えて、だれとも分かち合うことのできない、それぞれが背負うべき荷物があるということを教えていたのです。この点に関して、ウィリアム・バークレー先生も、次のような説明をしていました。「人には自分で負わなければならない重荷があります。パウロが用いている言葉は、兵士のかつぐ荷物にあたる言葉です。私たちの代わりに誰かが果たすことのできない義務があり、私たちが個人的に責任をとらなければならない働きがあります。たとえどれほど親切であろうとも、私たちに代わって誰も為すことのできないものがあり、どれほど願ったとしても、他の人に押しつけることのできないことがあるのです。」と。ですから、一つ目に私たちが覚えておかなければいけないことは、私たちには、絶対にひとりでは負えない、分かち合うべき重荷のほかに、私たち自身で負うべき荷物があるということです。

▶「重荷があるのです」

これに加えて、もう一つ注目すべき点は、ここで使われていた「重荷があるのです」ということばです。これには普段私たちがよく見るような現在形ではなくて、未来形が使われているということです。5節最後に出てきていました。この「重荷があるのです」と訳されている動詞には、先の話をする未来形が使われていたということです。この点に関して2017年版の聖書の方がよりわかりやすく、そのことを

読み取れると思います。それには「人はそれぞれ、自分自身の重荷を負うことになるのです。」と書いてありました。「重荷を負っています」ではなくて「重荷を負うことになるのです」と言われていました。言い換えれば、パウロはここで、信仰者の今現在の話をしようとしていたのではなく、将来先のことに目を向けていたということです。すべての信仰者には、だれとも分かち合うことのできない、それぞれが責任を取らなければならない荷物が将来待っている。もっと言えば、やがて来るキリストのさばきの日にあつて、私たちはひとりひとりが主の前に自分のなしてきたことに対する報いを受けるようになるということです。そのキリストのさばきの日にあるこの責任について、私たちはほかのだれかと分け合うことはいっさいできません。だれかが自分の代わりに背負ってくれることも、だれかにこれを押しつけることもできません。私たちはそれぞれがありとあらゆる面において、この地上で主に忠実であったかどうか、それを問われる日がやって来るということです。人にはおのおの負うべき自分自身の荷物、責任があるというわけです。

この点に関して、ひとりの聖書注解者もこんなことばを残していました。「私たちは一人で背負うには重すぎる『重荷』を互いに負い合うべきです。しかし、一つだけ分かち合うことのできない重荷があります。それは裁きの日における神に対する責任です。その日には、あなたは私の荷物を運ぶことはできないし、私もあなたの荷物を運ぶことはできないのです。」とされています。また、ほかのだれでもないパウロ自身も、別の箇所でもはっきり述べていました。Ⅱコリント5：9－10に、「：9 そういうわけで、肉体の中にあろうと、肉体を離れていようと、私たちの念願とするところは、主に喜ばれることです。：10 なぜなら、私たちはみな、キリストのさばきの座に現れて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあつてした行為に応じて報いを受けることになるからです。」と書かれていました。ここでも「私たちはみな」、各自と繰り返されていました。「私たち」と、パウロはここで自分自身のことも含めていました。パウロは自分自身もこのキリストのさばきの座に現れて、自分のしたことに応じて報いを受けることになるということを知っていました。各自がそのようになるということを、彼もよく覚えていました。ここにいる私たちひとりひとりも救われているのであれば、このキリストのさばきの座に現れる時が来るということです。もし自分には何の関係もない話だと考えている人がいるのであれば、覚えていてください。私もあなたも必ずこの審判者であられる主の前に立つ日はやって来るということです。

そして地上では、私たちは、幾らでも外側を取り繕うことができます。心の態度が間違っていたとしても、周りの人には気づかれないかもしれません。でも、すべてをご覧になっておられる主の目には、文字どおり何一つとして隠れているものはありません。私たちのふるまいも、私たちのことばも、私たちの考えも、私たちの心の動機も、すべてをご覧になっておられる主の前で、それぞれ個々人の歩みが調べられる時が来るのです。その日には、私たち、ほかの人と比べられるではありません。ほかの兄弟姉妹の歩みについて話をするのでもありません。ただ、自分自身が主の前に立って、私たちを救い出してくださった主から託された責任を自分自身が果たしたかどうかを問われるのです。もちろんこの時、自分の歩みをほかの人のせいにもできません。その時、神様に向かって、「神様、Aさんが私に何度も罪を犯して傷つけたのです」、「いやBさんがあなたの前にふさわしい態度をとっていませんでした。彼らの行動やふるまいが、私が責任を果たすことを難しくしたのです」などと言える人は、ひとりとしていないということです。もしそんなことを言おうとするのであれば、神様が問われることは、あなたはどうでしたか？あなたは自分の負うべき重荷を背負いましたか？あなたは自分の果たすべき責任を果たしましたか？私が愛によって、ひとりひとりに与えた教えに忠実に従って、あなたは最後まで歩みましたか？そう問われる日はやって来ます。地上で、神様のためになしてきたすべてのことに関して、もちろん今学んでいるように、兄弟姉妹のあやまちを正してあげるといっても、重荷を負い合うことも同じです。私たちはほかの人がどうかではありません。私たちは自分自身がどれだけ忠実に歩んだのかどうか、そのことを問われる日がやって来るということです。

だとすると、果たして私たちは普段からこの日のことに心を留めているでしょうか？私たち自身が主の前に背負うべき荷物や私たち自身が果たすべき責任。そのことを覚えて、みことばに日々従って神様を喜ばせたいと歩んでいるでしょうか？それとも自分の責任を果たすことよりも、いつもほかの人のことに心を奪われていないでしょうか？いつもほかの人と自分を比べたり、ほかの人を引き合いに出してきて、自分にはこういう理由があって果たすことができないのだと言って、自分の責任を果たすことを拒んでいたりはしないでしょうか？正直になれば、こうしてみことばが先のことをはっきりと教えてくれているにもかかわらず、私たちの目は容易に今、この世のことにのみ向いてしまいがちです。将来に必ず待っていると約束されている主の報いや主の約束を忘れて、いろいろな理由で今の責任を忠実に果たそうとしないことがあります。そんな私たちは自分の考えや思いに支配されるのではなくて、みことばの真理で心を満たしている必要があります。私たちは、いつもみことばのレンズでもって先をしっかりと見据え、正しく今の物事を見ている必要があるのです。みことばが先のことにに関して教えていることをいつも心に留めている必要があります。

●聖書の描く二つの大きなさばき：

ということで、きょうはもう少しだけ、この先、私たちすべての人に待っている神様のさばきについて、みことばが約束している事実を目を向けてみましょう。聖書は大きく二つのさばき——救われていない者に対するさばきと救われている者に対するさばきに関して、それぞれはっきりと描いていました。私たちを待っているものがどんなものなのか、聖書が言っていることに心を留めてみましょう。

1) 白い御座のさばき

まず一つ目に、救われていない未信者に対するさばきとして、「白い御座のさばき」と呼ばれるものがありました。かたくなに神様を信じなかった者が、最終的にすべてを造った創造主の前で受けることになる、その恐ろしい出来事に関して、みことばはこのように記していました。黙示録20：11-15に「：11 また私は、大きな白い御座と、そこに着座しておられる方を見た。地も天もその御前から逃げ去って、あとかたもなくなった。：12 また私は、死んだ人々が、大きい者も、小さい者も御座の前に立っているのを見た。そして、数々の書物が開かれた。また、別の一つの書物も開かれたが、それは、いのちの書であった。死んだ人々は、これらの書物に書きしるされているところから従って、自分の行いに応じてさばかれた。：13 海はその中にある死者を出し、死もハデスも、その中にある死者を出した。そして人々はおのおの自分の行いに応じてさばかれた。：14 それから、死とハデスとは、火の池に投げ込まれた。これが第二の死である。：15 いのちの書に名が記されていない者はみな、この火の池に投げ込まれた。」とあります。これこそが神様を拒み続けたすべての者に待っている悲劇的なさばきでした。

未信者は今、自分の好き勝手に歩んでいるかもしれません。そのようなことをしても何の結果も伴わないと思込んでいるかもしれません。でも聖書が約束していることは明白でした。最後にはみなどんな悪や罪をも正しくさばかれる聖なる方の前に立って、そして自分が地上で行ったすべてのことが記録されている書物が開かれて、そこに記されている犯したすべての罪によって、おのおのがさばかれるようになるということです。そしてこの時、どんなに助けや救いを願ったとしても手遅れです。その場には自分を弁護してくれる者などだれもいません。キリストによって救われた者の名が記されている「いのちの書」に名がない者はすべて有罪と認められ、いっさいのあわれみを受けることなく、自分の犯したありとあらゆる罪の罰を受けることになるのです。燃える火の池の中で、永遠に終わることのない苦しみを、神様の御怒りを味わい続けることになるのです。それが、神様に逆らい続ける者、亡くなっていた未信者を最終的に待っている白い御座のさばきでした。

2) キリストのさばきの座

二つ目に、これとは別に救われている信仰者に対してのものとして、「キリストのさばきの座」と呼ばれるものがありました。これがきょうみことばを通して見てきたものです。そして絶対に覚えていて

ほしいのは、これは未信者に下るさばきとは全然違います。みことばもはっきりと何度も何度も述べているように、救われている者はもう罪に定められることは決してありません。本来であれば、常に神様に逆らい続けていた私たちすべてが自分たちの罪深さのゆえに、先ほど見た白い御座で永遠にさばかれてしかるべき存在でした。でも、感謝なのは、キリストが十字架で犠牲を払ってくださり、すでに罪の贖いを成し遂げてくださったからこそ、キリストがその大きな愛のゆえに罪の赦しを備えてくださったからこそ、キリストを信じる信仰を通して本当の救いを得た者たちは、ただ恐れながらさばきを待つ身ではもうなくなったのです。私たちはキリストにあってさばきを恐れる者ではなくなりました。ローマ 8：1-2にも「:1 こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。:2 なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。」と記されています。私たちは、私たちの想像もできないほどのすばらしい恵みを受けました。私たちが本来値した永遠のさばきではなく、神の愛を受け、私たちは恵みによって罪の赦しを受けたのです。私たちはさばきを恐れる必要のない者へと変えられました。

でもそれと同時に、信仰者にはひとりひとりその生涯で行ったすべてのことに関して、主によって正しく評価されるその日は存在するということです。いつの日か、自分を救ってくださったあわれみ深くすばらしいイエス・キリストの前に立って、救われたその日から自分が主のためになしてきた、ありとあらゆる働き、ふるまい、ことば、態度だけではありません、動機の部分に至るまで、すべて正しく判断されるのです。このことについて、パウロは別の箇所でもこのように述べていました。Iコリント 3：10-15、大切な箇所なのでよく見てください。そこには「:10 与えられた神の恵みによって、私は賢い建築家のように、土台を据えました。そして、ほかの人がその上に家を建てています。しかし、どのように建てるかについてはそれぞれが注意しなければなりません。:11 というのは、だれも、すでに据えられている土台のほかに、ほかの物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです。:12 もし、だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、わらなどで建てるなら、:13 各人の働きは明瞭になります。その日がそれを明らかにするのです。というのは、その日は火とともに現れ、この火がその力で各人の働きの真価をためすからです。:14 もしだれかの建てた建物が残れば、その人は報いを受けます。:15 もしだれかの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、自分自身は、火の中をくぐるようにして助かります。」と書いてあります。パウロは、キリストの福音によって救われた者たちが、キリストという土台の上に建築物を建てている、築いている様子をここに描いていました。みんな同じキリストという土台の上に立っているのです。そして私たちは、それぞれそのキリストの土台の上に建物を建てるのですが、自分が建てた建物がある時、「火」によって焼かれることになるというのです。勘違いしてほしくないのは、この「火」というのは、罪へのさばき、罪への罰を表しているではありません。私たち救われた者たちの罪は、もう主の十字架によって完済されました。この「火」はひとりひとりの働き、ひとりひとりがなしてきたことの真価を試すためのものでした。

そしてその火で、それぞれが試された結果、ある者の建てた建物は残るのです。残れば、その人は報いを受け、もしだれかの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けると言われていました。ここでも勘違いしてほしくないのは、この「損害」というのは、与えられている救いを失ってしまうという話をしているではありません。15節に「建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、自分自身は、火の中をくぐるようにして助かります。」と書いていました。この人は滅んでしまうものではありません。この中から助かるのです。救いを失うのではないのです。ここで言われていることは、キリストによって救われて、キリストの土台の上に乗るで金や銀、宝石のように価値あるもので建物を建てた人、言い換えれば、神様に喜ばれることを求めて神様に栄光を帰すことをなした者は、主から大きな恵みを、大きな報いを受けることになり、その反対に、同じ土台の上に乗るで木、草、わらのような消えてしまう、無価値なもので建物を建てた人、言い換えれば間違った動機を持って、神様のみこころを求めるよりも、

神様の栄光を現すことをよりも、妥協して別のことを求めるような人の建物は、最後にはきれいに火で燃え切ってしまうと言うのです。滅んでしまうという話ではありません。土台の上に価値あるものを忠実に建てていけば手にすることのできていたはずの主からの報いを、ある人は手にすることができなくなると言うのです。

いま一度考えてみてください。神様は私たちの外側だけでなく、心の内側の隅々までご覧になっておられるお方です。そんな方の前に、私たちがみことばに従って正しい動機で喜んで仕えているのであれば、たとえ人に気づかれなかったとしても、だれにも感謝されなかったとしても、主はいつもそれに心を留めてくださっていて、その歩みに対してふさわしい報いを、ふさわしい祝福を与えてくださるのです。ただ同時に、もし外側だけは幾ら立派に見えても、正しい思いや正しい動機が伴っていないのであれば、もしそれらが自分のためになされたものであれば、神様の前には喜ばれない価値のないものでした。だからこそ、すべての信仰者にとって、神様を愛する心から永遠に価値あるものを追い求めて、建物を忠実に建てていくということは欠かせないことでした。主にお会いするその時に「よくやった、忠実なしもべよ」、私たちはそう言われることを楽しみにしながら、私たちを救ってくださったすばらしい主にお会いすることを楽しみにしながら、必ずいつの日か正しく報いてくださるその方の前に、私たちは喜ばれることをなしていこうとするのです。まさにパウロ自身もそのように歩んでいた人物でした。彼は地上に置かれている、その少しの間、最後まで大きな愛を持って、神様や人に対して仕え続けていました。自分自身を罪から救い出してくださった主の前に喜ばれること、本当に価値あることを追い求め続けていたのです。だからこそ彼は最後にこう言うこともできました。Ⅱテモテ4：7-8に「:7 私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。:8 今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるのです。私だけでなく、主の現れを慕っている者には、だれにでも授けてくださるのです。」と。

果たして私たちは、いつの日か正しくすべてをさばかれるその方の前に立つ日がやって来ることを覚えながら日々を歩んでいるでしょうか？自分の身にこの先何が待っているのかということをおぼえてはいないでしょうか？もし、まだこの中にあなたを造った創造主なる神様にかたくなに逆らって、キリストを自分のこととして信じ、受け入れていない方がいるのであれば、どうかきょう悔い改めて、神様の救いを求めてください。あなたを罪から唯一救うことのできる救い主の愛とあわれみを心から求めてください。みことばははっきりと教えてくれました。いつの日か必ずそれぞれのした行いに応じて、神様がすべてに正しく報いる日はやって来ます。神様の御怒りが永遠に注がれるその日はやって来ます。だからこそ、先延ばしにするのではなくて、まだこうして今、悔い改めの機会が残されている時に、自分の罪を悔い改めて、このイエス・キリストを自分の救い主として、主として信じ、受け入れてください。この方のうちにのみ救いが、この方のうちにのみ唯一の希望があります。この方を自分のものとして歩んでください。

また、もうすでにキリストを信じ、受け入れて、キリストのためにすべてを捨てて歩んでいきたいと願っておられる兄弟姉妹の皆さん、果たして私たちは、外側のふるまいだけではなくて、内側の心の動機さえもご存じであられる方に心を留めながら、どんな時も喜んで仕えようとしているでしょうか？今ではなくて、永遠に価値あるものを自分の喜びとして歩んでいるでしょうか？私たち、主にお会いするのは楽しみではありませんか？私たちを救ってくださったその方に、必ずいつかお会いする時がやって来ます。私たちが願うのは、その時に主が「よくやった、忠実なしもべよ」と言ってくださることです。この方は私たちの忠実さに報いてくださると約束してくださっていました。それならば、私たちは主が私たちに与えられた責任に忠実であり続けようとするのです。人の目は幾らでもごまかせます。でも、この方の目をごまかせる者はいません。だからこそ主にお会いするその時、そのことを楽しみにしながら、救われた喜びを心から感謝しながら、私たちは自分に与えられた責任を忠実に果たしていきましょ

う。鍵は、みことばのレンズで、いつも先をきちんと見据えて、そして正しく今の物事を見続けることです。将来正しく報いてくださると言われているその方を覚えて、自分の責任に忠実であることが、兄弟姉妹の罪へと向き合う時にも、大切な私たちがとるべき10個目の応答でした。

さて、こうして私たちはパウロのことばから罪に陥った兄弟姉妹にどのように応答すべきなのかということを考えてきました。神の家族として、私たちがどのようにして互いの間で愛を示し、思いやりを示していくのかということ学びました。間違いなく言えるのは、私たちが自分のことにとらわれていれば、みことばが求めているような歩みはできないということです。私たちがプライドにあふれて、いつも自分自身のことを優先し、私たちがいつも自分の基準に立って、自分が何を手にすることができるだろうかと考え続けているのであれば、へりくだって自分自身を差し出そうとすることはしないでしよう。私たちは自分自身の罪深さを忘れて、ほかの人の罪深さにのみ心を留め続けているのであれば、私たちはあわれみや柔和さを示すのではなく、不満や不平を表すでしょうし、互いの重荷を負い合おうともしないでしょう。私たちはいつも覚えていなければいけません。私たちがこうして罪の赦しを得、さばきを恐れることもなく、神の家族として歩める特権にあずかっているのは、ほかのだれでもないイエス様がその大きな愛を示してくださったゆえだということです。私たちの罪のすべてを背負って、十字架にかかってくださった方のゆえだということです。本来ならかたくなに神様に逆らい続けていた私たち自身が受けるべきその罪の罰を、私たちが負うべきその罪の重荷を、主がみずから背負ってくださいました。本来なら、この方こそすべての者から仕えられるお方なのに、それだけが値するお方なのに、この方が仕える者として、みずからこの世に行き、ご自分のいのちをささげてくださったのです。私たちに愛を示してくださったのです。私たちはただこの主イエス・キリストのみわざを信じ、受け入れた、恵みによって救われただけの者です。そんな私たちが、自分たちが受けた愛で互いに愛し合おうとするのであれば、互いの重荷を負い合おうとするのであれば、私たちは主の栄光を現すことになり、何より私たちに示してくださったイエス・キリストの残した姿にならう、弟子としての生き方をしていくことになるのです。もちろん私たちはみんな罪を抱えています。私たちはみな弱さや愚かさを抱えているからこそ、これまでもだれかによって傷つけられてしまったことも、また逆にだれかを傷つけてしまったようなこともあるでしょう。いろいろな難しさを繰り返し覚え続ければ、兄弟姉妹とともに歩むことのために覚えるようになっていくかもしれません。でもだからこそ、私たちはみことばが教えていることに、神様が求めていることに目を留めることです。私たちは互いの重荷を負い合っていくことが欠かせません。私たちのために、罪の重荷を背負ってください、愛を示してくださった方を心から愛するからこそ、私たちはその方が示してくださった、見せてくださったように愛を示そうとするのです。それこそが同じ神様によって救われた、同じ神様を愛する家族としての生き方でした。どんな時も十字架で示されたキリストの愛を覚えて、その愛に感謝する者として、続けて一緒に歩いていきましょう。